

つくり
育てる漁業
人と技術の
ネットワーク

ACN REPORT

特定
非営利
活動法人

ACNレポート
第44号

2016年1月30日発行
(毎年2回1月・9月発行)

編集/NPO法人ACN事務局
発行人/田嶋猛(NPO法人ACN代表)
発行所/NPO法人アクアカルチャーネットワーク
〒833-0056 福岡県筑後市久高1343番地
ACN事務局/クロレラ工業株式会社
生産本部 技術特販部内
TEL.0942-52-1261
FAX.0942-51-7203

NO.44 2016.JAN.
AQUACULTURE NETWORK

1. 新年の挨拶

NPO法人 ACN 理事長 田嶋 猛

2. ACN 養殖用種苗生産中間速報

NPO法人 ACN

3. 養殖・販売概況

NPO法人 ACN

4. ACN 海外レポート

太平洋貿易株式会社 会長 田嶋 猛

5. ACN 懇話会開催予定

21世紀に入って以降の 日本の海産魚類養殖

(アクアカルチャーネットワーク)

NPO法人 ACN 理事長 田嶋 猛



2016年 年頭のご挨拶

新春を迎え謹んでお慶び申し上げます。

読者の皆様には平素よりNPO法人ACNの活動にご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

21世紀(2001年1月1日)が始まり、ちょうど15年が経過しました。また、昨年10月にはTPP交渉が大筋合意に至りました。この機会にACN会員と関係が深い日本の海産魚類養殖について、その収穫量と生産額の推移を振り返ってみたいと思います。

農林水産省の海面漁業生産統計調査によれば、2001年から2014年までの14年間で、漁業・養殖業における就労者数は252千人から173千人(-31%)、収穫量は6,126千トンから4,806千トン(-22%)で、生産額は17,803億円から14,400億円注1(-19%)と減少しています。(注1:生産額は2014年でなく2013年の数値、以下も同様)

魚介類(海藻も含む)海面養殖は、収穫量では1,256

千トンから996千トン(-21%)、生産額で5,029億円から4,064億円(-19%)に減少しています。

海面魚類養殖の収穫量は264千トンから238千トン(-10%)、生産額で2,305億円から2,149億円(-7%)と減少していますが、漁業・養殖業全般の中では減少率は小さいといえます。以下、養殖魚類で収穫量の多い順にブリ類からシマアジまで7魚種の推移をみてみます。

1) ブリ類

収穫量は2001年の153.1千トンから2014年には134.6千トン(-12%)となり、生産額は1,184億円から1,115億円(-6%)となっています。2014年のブリ類の内訳ではブリ94.4千トン、カンパチ36.3千トン、その他(ヒラマサ)3.8千トンとなっています。生産者価格は2011年後半から原価割れの500円/kgまで下落しましたが、2013末には700円/kgに戻し、2015年前半

年次	ギンザケ	ブリ類	マアジ	シマアジ	マダイ	ヒラメ	フグ類	クロマグロ	その他	合計
H13(2001)	11,616	153,075	3,308	3,396	71,996	6,638	5,769	—	7,991	263,791
H14(2002)	8,023	162,496	3,462	2,931	71,754	6,221	5,231	—	8,287	268,406
H15(2003)	9,208	157,568	3,377	2,313	83,002	5,940	4,461	—	8,049	273,917
H16(2004)	9,607	150,068	2,458	2,668	80,959	5,241	4,329	—	6,951	262,280
H17(2005)	12,729	159,741	2,329	2,738	76,082	4,591	4,582	—	6,129	268,921
H18(2006)	12,046	155,004	1,977	3,300	71,141	4,613	4,371	—	5,930	258,383
H19(2007)	13,567	159,749	1,773	3,211	66,663	4,592	4,230	—	8,289	262,073
H20(2008)	12,809	155,108	1,695	2,638	71,588	4,164	4,138	—	7,991	260,132
H21(2009)	15,770	154,943	1,682	2,522	70,959	4,654	4,680	—	9,557	264,766
H22(2010)	14,766	138,936	1,471	2,795	67,607	3,977	4,410	—	11,751	245,712
H23(2011)	116	146,240	1,094	3,082	61,186	3,475	3,724	—	12,689	231,606
H24(2012)	9,728	160,215	1,093	3,131	56,653	3,125	4,179	9,639	2,709	250,472
H25(2013)	12,215	150,387	957	3,155	56,861	2,501	4,965	10,396	2,234	243,670
H26(2014)	12,809	134,608	836	3,186	61,702	2,607	4,902	14,713	2,607	237,964

■ 海面養殖業 魚種別収穫量

(農林水産省HP 統計データ)
単位: トン

注: 平成23年は、東日本大震災の影響により消失したデータは含まない数値

その他には、平成14年から平成23年の値にクロマグロを含む。
資料: 農林水産省 HPより

まで800円/kgと堅調に推移していましたが、その後は下落傾向です。

2) マダイ

収獲量は2001年の72千トンから2014年には62千トン(-14%)となり、生産額は660億円から492億円(-25%)に減少しました。生産者価格は2013年春には800円/kgでしたが、日本産水産物の放射能汚染を不安視する韓国への輸出停滞により500円/kgまで下落しました。2015年4月以降から価格は徐々に上昇に転じましたが、2013年および2015年の2回の輸入魚粉高騰による配合飼料の値上げのため、配合飼料比率の高いマダイの養殖生産者にとっては厳しい経営が続いています。

3) クロマグロ

農水省の統計で2011年まで「その他」に分類されていたクロマグロは、2014年の収獲量は14.7千トンで、生産額は293億円と、ブリ類、マダイに次ぐ主要養殖魚種となっています。2013年の生産額/収獲量の単純計算では2,800円/kgとなります。

4) ギンザケ

収獲量は、2001年の11.6千トンから2014年には12.8千トン(+10%)、生産額は40.7億円から47.9億円(+18%)に増加しました。ギンザケは、生産と流通が一体となった販売努力で、2001年以降の海面養殖魚類の中では唯一収獲量と生産額が上昇しました。しかし、2011年の東日本大震災で壊滅的な被害を受け、市場では一気に輸入物に入れ替わりましたが、その後急速に収獲量・生産額共に回復しています。

5) トラフグ

収獲量は2001年の5.8千トンから2014年には4.9千トン(-15%)、生産額は145.7億円から85.8億円(-41%)に減少しました。生産者価格は、中国からの

輸入の影響を受け2~3年毎に上昇下落を繰り返しています。2005年には一時1,500円/kgを切る場面もありましたが、輸入の減少に伴って上昇し2011年には2,500円/kgになりました。しかしながら、東京市場での身欠きフグ販売が伸びず2013年は2,000円/kgを割り込みましたが、2015年の年初から急回復し年末には3,500円/kgとなりました。

6) ヒラメ

収獲量は、2001年の6.6千トンから2014年には2.6千トン(-60%)、生産額は109.9億円から32.9億円(-70%)と激減しています。この要因としては、韓国からの輸入増および韓国ヒラメによるクドア食中毒発生で消費が減少したことが挙げられます。生産者価格は2001年の2,000円/kgから下落傾向で、2010年には1,000円/kgまで下がりましたが、その後少し上昇して2013年以降1,300円/kg前後で推移しています。

7) シマアジ

収獲量は2001年の3.4千トンから2013年3.2千トン(-6%)、生産額は52.0億円から44.5億円(-14%)となっています。2010年以降の生産者価格は2,000~1,800円/kgと安定しています。その理由としては、養殖用のシマアジ種苗数が毎年不足気味なため、過剰生産防止となっていることが考えられます。

T P Pに関しては、国内の第一次産業界では危機感を煽る報道が目立ちますが、生産物の輸出を目指す水産養殖業界にとっては、T P P交渉加盟12カ国の輸出入関税の撤廃等は追い風になると思います。

最後になりましたが、本年が皆様にとりまして実り多き年になりますよう祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

本年もどうぞよろしくお願いたします。

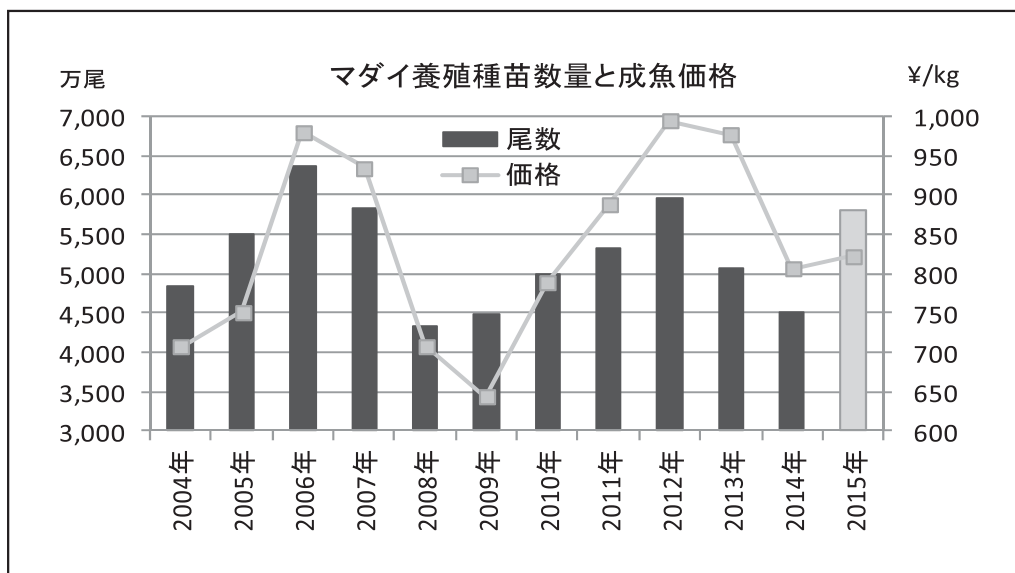
ACN養殖用種苗生産速報

2015年9月~12月出荷尾数
2016年1月~予測

1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

2015年9~12月に出荷された夏越し種苗は前年比196%の709万尾であった。また同期間に仕込まれた種苗及び2016年1月以降仕込み予定の種苗の販売予定数は、**近畿大学、山崎技研、バイオ愛媛**など17社(民間16社、公的1事業場)で、それぞれ前年比89%の2,955万尾、前年比139%の2,150万尾であり、今年度(2015年9月~2016年8月)の養殖用種苗数は5,800万尾と前年比129%の増加が予想される。

次頁図は養殖用種苗数と東京都中央卸売市場の養殖鮮魚の年平均価格の推移を示したものである。2013年、2014年の種苗尾数の減少の結果、成魚の在池量も減少し、2015年から成魚価格が上昇に転じたことが推察される。しかし、2015年に販売予定とされる5,800万尾全量が養殖場に導入された場合、再び価格が下落する可能性も懸念される。



資料：成魚価格 東京都中央卸売市場（全场） 鮮魚／たい類／まだい（養殖）
 種苗尾数 ACNレポート種苗生産速報（記載年9月から翌年8月まで1年間の数値）
 2015年は推定値

2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2015年9月～12月の採卵は**近畿大学、大島水産種**苗など民間4社（前年3社）で、種苗生産は5社（前年3社）であった。12月までに出荷された種苗は約20万尾で、大半が香川県の加温施設のある陸上養殖場に導入され、春の水温の上昇を待って海面生簀に移される予定である。今シーズンの特徴として、例年より2週間早く11月下旬から親魚を仕立てて、1月上旬の採卵準備を行う生産者が増加した。その理由としては、成魚の在池数量減少に伴い2015年の年明けから年末まで続いた高値相場のため、従来の養

殖生産者に加えて大分県の陸上養殖場からの注文の増加が挙げられる。種苗出荷の最盛期は例年通り5月以降であるが、加温施設のある陸上養殖場や夏場の疾病が懸念される海面養殖場からは、3月末からの早期出荷要望が増えており、今後の動向に注目したい。

全雄種苗生産技術による成魚が2015年末に出荷され相場より高く取引されたが、成長が遅いこと、白子の大小差があること、成魚までの生残率が低いことなどの課題が残っている。

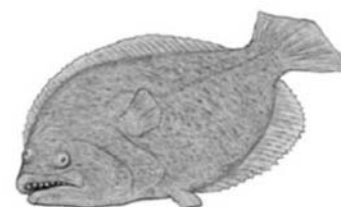
3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

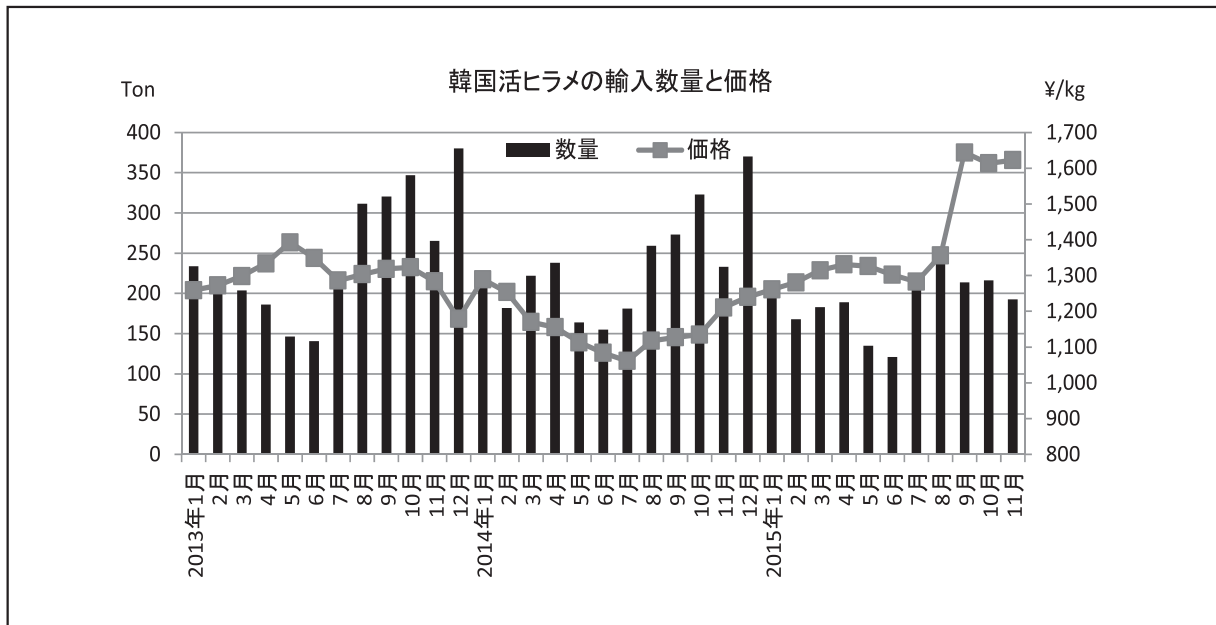
2015年9月～12月の種苗出荷数は、**まる阿水産、マリンテック**など10社（民間8社、公的2事業場）で204万尾（前年比124%）と増加している。2016年1月現在の種苗場の出荷予定在庫は105万尾であり、今後の生産出荷予定数を前年並みと仮定すると、2015年9月～2016年8月の養殖用種苗数は前年比50万尾増の約500万尾と予想される。

大分県の養殖場では2015年には給餌量を控えたため、例年に比べて歩留まりは良かったものの、成長遅れのため12月までの種苗の導入数は少なかった。

次頁図のように2015年後半から、韓国産ヒラメの輸入数量が減少したため成魚価格は上昇しており、

ヒラメ種苗導入のチャンスではある。が、トラフグ成魚価格も高値で推移しているため、ヒラメ種苗導入数の大幅増加はないと予想する。





資料：財務省貿易統計

4. シマアジ 縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧縞鯧

成魚相場が安定しているため種苗導入意欲は高く、2015年には390万尾導入された。2016年も導入意欲が衰える可能性は低く、400万尾以上の需要が発生する

ものと思われ、種苗生産に新規参入する種苗生産施設もある。



文中社名敬称略

養殖・販売概況

2016年1月
ACN

1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

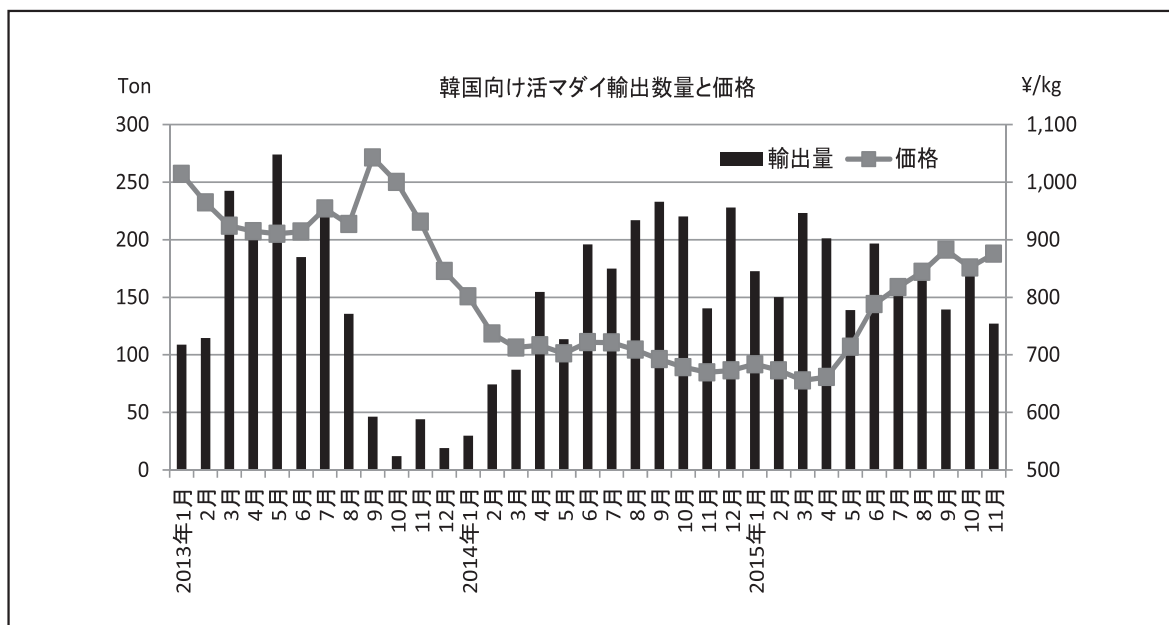
2013年秋から下がっていたマダイの卸売市場価格は2015年3月を底に回復をはじめ、浜値（生産者価格）も6月には700円、9月には800円前後まで上昇した。浜値下落の要因であった過剰在庫が解消されたためと考えられる。

また、2015年3月までは、それまでの成魚安値に加えて、魚粉高騰による飼料価格値上げ、愛媛地区で深刻な影響を及ぼす赤潮被害と相まって、制限給餌で育成する傾向があった。主として韓国輸出向けの大サイズ（2kg/尾UP）では、年初の安値のため育成尾数が減少したために、2015年末の浜値は900円/kg近くまで回復した。一方で、2016年1月から浜値

が下がり始めていることや、次頁図に示すように、韓国向け輸出数量が2015年7月から前年同月比で減少していることが懸念される。

生育面では、2014年同様に各地でエドワジエラ症が発生し、九州西北部では7～10年ぶりにベネデニア・セキイが寄生するハダムシ症が発生した。大サイズでの発症が多く、薬浴等の対応が遅れると、約20日間で体表全体に潰瘍ができ商品価値が落ちるため、生産者にとっては深刻な疾病である。

マダイ相場安定のためには堅調な需要が不可欠であり、桜の咲く春からの需要シーズンに期待したい。



資料：財務省貿易統計

2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2015年のトラフグ商戦は、本格シーズン前の9月下旬から始まり、浜値（生産者価格）は品薄とご祝儀相場もあり4,000円/kgでのスタートとなったが、10月中旬には3,500円/kgまで下がった。相場高で荷動きが悪い状況下、11月中旬には年内の浜値下落を予想した生産者が800gサイズを大量に出荷したため、11月末には2,600円/kgまで下がった。

しかし、12月に入ると800g/尾UPが在庫薄となり、市場は1kg/尾UPの出荷待ち状態となり、シーズン前の品薄状態がやっと浜値に反映されること事となった。12月中旬には1kg/尾UP海面物 2,600～2,800円/kg、同陸上物3,000円/kgと上昇し、去年同期比800～1,200円/kgの高値となった。品薄状態は続き、年末

には海面物3,000円/kg、陸上物3,500円/kgまで上昇した。また、一部の海面養殖生産者は年明け白子入り1.2～1.5kg/尾UPで浜値3,500円/kgでの出荷を目指している。

2016年1月上旬の浜値は、天然の水揚げ増加で海面物3,000～3,200円/kg、陸上物3,200円/kgと下げている。2月9日の「ふくの日」まで高値相場が続くとこの予想もあり、越年物の荷動きの停滞が懸念される。

生育面では、昨年9月末時点で、四国、九州で赤潮・エラムシ・ハダムシ等の寄生虫症での被害が報告されており、当歳魚を含め数十万尾が斃死した模様であり、2016年も国内物では品薄状態が続くと思われるが、中国物の輸入動向が気掛かりである。

3. ヒラメ 平目

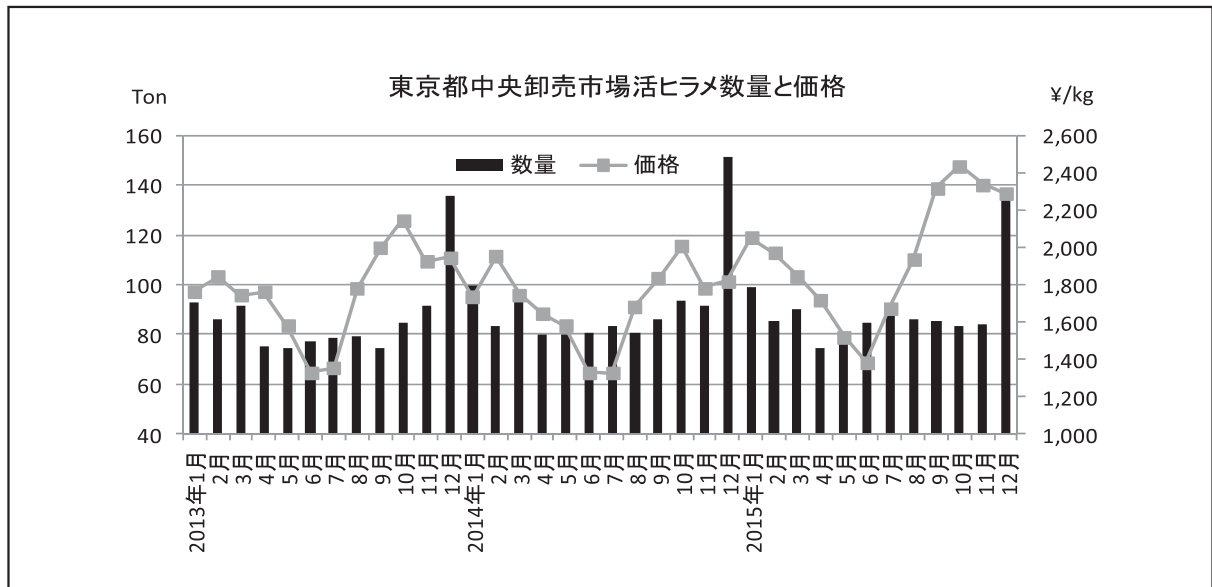
2015年8月～9月にかけて浜値（生産者価格）は急上昇し、800g/尾サイズ1,500円/kg、キロ物で1,600～17,000円/kgとなり、年末まで下落することはなかった。価格急上昇の理由としては、韓国側が輸出価格を上げ、数量も抑えたことと国内の品薄が挙げられる。

例年需要が減少するといわれる成人式以降の浜値は100円/kg下落しているようである。また、大分県の陸上養殖場でのトラフグからヒラメへの回帰は、前年から続くトラフグ好相場を受け、限定的になるものと思われる。

生育面では、大分県でリンホシスチス症の蔓延と

赤潮での被害はあったものの、給餌量の制限等で成長は遅れたが、大量斃死には至らなかった模様である。エドワジェラ・タルダ症用の注射ワクチン「京都微研マリナーE d」が発売されているが、感染魚には使用できないため事前に検査する必要があることや、2週間間隔で2回の注射など作業の煩雑さもあり、使用には様子見の生産者が多いのが現状である。

次頁図は東京都中央卸売市場での3年間のヒラメ活魚（天然と養殖）の合計取扱数量と平均価格である。価格は、国内養殖物が品薄になる夏から秋にかけて上昇し、取扱数量は、12月が突出している。



資料：東京都中央卸売市場（全場） 活魚類／活ひらめ／天然と養殖の区分なし

4. ブリ・ハマチ 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰 鯰・鰻鯰

2015年9月1日時点（全海水調べ）でのブリ・ハマチの養殖魚放養尾数は、当歳魚16,678万尾、2年魚17,761万尾と、前年同月比で当歳魚11%減、2年魚20%増となっている。

2015年シーズンのモジャコ尾数を1,800万尾程度は残るものと想定していたが、ベコ病対策による破棄、および歩留りの悪いジャミサイズの採捕もあり、2012年、2013年の9月時点の当歳魚尾数に匹敵する少なさである。

2015年の夏以降の動きを振り返ると、8月時点で3年魚の在庫は終了するが、2年魚ではこの時点で、年末の先安観と秋の餌飼料の使用量増によるコストを考慮して売り急ぐ動きがみられ、浜値（生産者価

格）600円/kg後半の声も聞こえた。10月に入って本格的に5kg/尾の出荷となったが、供給量が前年を上回り、天然ブリの水揚げの時期も重なり、引き合いが弱い状況となった。更に、年末にかけて気温が高く鍋の需要も少なく、時化の時以外は養殖物の荷動きは低調で、4～5kg/尾の浜値は650～670円/kg、地区によってはさらに下げた模様である。

生育面では、2015年秋から年末にかけて九州東部で新型レンサが発生し斃死が続いたが、年明けには終息している模様である。

2015年は、飼料価格の上昇と後半の相場の下げ基調から、採算的には厳しいシーズンであった。

5. カンパチ 間八

2014年では、年初に3.5～4.0kg/尾サイズの品薄感があり、浜値は1,000円/kgに回復したが、初夏に生産者側が1,200円/kgまで上昇させたことで、量販店などが買い控えしたため、年後半には相場が低迷する状態になった。2015年は稚魚及び飼料価格上昇で浜値に反映させたい状況であったが、前年の轍を踏まないようにするため浜値を1,100円/kg程度に維持

することとなった。10月以降は、天然ブリ水揚げで量販店の品揃えが変わり、水温低下で瀬戸内海のカンパチ出荷を終了させる時期である。例年では相場は年末まで弱含みで推移していた2015年は1,000～1,100円/kgを維持した。2016年は瀬戸内の出荷終了後の相場に期待したいが、春先になるかもしれない。

6. ヒラマサ 平政

2015年のヒラマサの浜値は、カンパチが1,000円/kg台を維持していたこともあり、1,000円/kgで推移

したが、カンパチの荷動きが鈍いこともあり、それ以上に相場が上昇する余地はなかった。年末には900

ACN [海外レポート] REPORT

アメリカ～キューバ紀行

2016年1月5日

太平洋貿易株式会社

会長 田嶋 猛

弊社が会員となっている（公社）福岡貿易会では毎年経済視察団を派遣しており、昨年の訪問先は、福岡市との姉妹都市として、締結10周年記念セレモニーが開催される米国東南部のジョージア州アトランタ市をはじめ、ルイジアナ州ニューオーリンズ市とフロリダ州マイアミ市、及びフロリダ海峡を挟んだ隣国キューバの首都ハバナでした。

視察団は、アメリカ6泊8日の基本コースに8名、そしてキューバ9泊11日の追加コースに13名で、総勢21名が2015年11月15日福岡を出発しました。ご存知のように、キューバとアメリカでは国交回復が図られ、7月に双方の大使館が再開設されており、私は「キューバを早く見ておかないと、すぐにアメリカ資本で近代化されてしまう」という周囲の声に押されて、追加コースに参加しました。

キューバで印象的であったのは、首都ハバナのホテルでは、朝食時にウェイターにカップ持ち上げて「コーヒー」を頼むと「あちら」とコーヒーメーカーを指差すだけ、ショップで店員に「これを下さい」と菓巻を指差すと「1本しかない」との返事。このようなサービス精神の欠如や物不足は1980年代の中国をみる思いでしたが、温暖な気候のせいか、キューバの人々は楽観的に暮らしているように見えました。

以下に、一緒に旅行したお二人から寄せられたアメリカとキューバ紀行を紹介いたします。

【アメリカ東南部紀行】

(公社)福岡貿易会

専務理事 甲斐 敏洋

今回は普段行く機会が少ないアメリカ東南部のアトランタをベースにニューオーリンズ、マイアミを訪問した。

アトランタでは福岡市長によるアトランタ市長表

敬訪問、福岡シティプロモーション、アトランタ市主催レセプション、在アトランタ総領事館歓迎レセプション等々の公式行事に加え、デルタ航空本社、デルタ航空博物館・同カーゴターミナル、コカコーラ博物館、CNNスタジアムなどアトランタを代表する企業訪問と、ジェトロ・アトランタの森所長による東南部経済状況のブリーフィングと非常に充実した内容であり、時間に追われるものであった。

他訪問先はアメリカの中でもスペイン・フランス統治時代の面影を残し、ミシシッピ河畔の穀物・綿花・農産物の輸出港として発展しその後工業都市、観光都市として、又ジャズの街として多くの観光客を集めているルイジアナ州「ニューオーリンズ」とカリブ海クルーズの基地として、観光基地として世界から多くの観光客を集めるフロリダ州「マイアミ」とアメリカ最南端の地「キーウエスト」を訪問した。

今回のアメリカ訪問の目的の一つとしてマイアミ港湾局が運営管理するクルーズ船ターミナルを視察し、2015年11月で250艘を超え、2016年は400艘のクルーズ船が来航予定の博多港にとってハード・ソフト両面から参考とすべき点を学ぶことであった。クルーズターミナルには4艘の大型クルーズが停泊しており（写真1）、最新のターミナルは空港を思わせるバゲッジ取扱いと観光客を和ませるターミナルのデザインと色彩には目を奪われた。

又折角の機会であるので、アメリカ最南端、マイアミから約160マイルに位置するキーウエストまで足を延ばした。国道1号線の南の出発点キーウエストまでサンゴ礁の島々が42の橋で繋がれ、海の上を何処までも続くハイウェイ（写真2）「オーバーシーズハイウェイ（海を超える道）」のドライブを楽しんだ。キーウエストでは「老人と海」「武器よさらば」「誰がために鐘は鳴る」などで有名なヘミングウェイの住んでいた家も訪問した。

マイアミ、キューバ

九州大学名誉教授 牛島 和夫

11月19日にアトランタを発ち昼前にマイアミ国際空港に到着。現地ガイドの久保田さんが出迎えてくれる。早速、貸切バスで市内に向かう。マイアミ市を含むマイアミデード郡には人口300万人のうち、亡命キューバ人が90万人以上住んでいるということだ。キューバの人口は1,100万人というからかなり大きな割合である。マイアミ市の市長も亡命キューバ人だとのことである。マイアミ市にはリトルハバナ地区が形成され、街角には彼らが集まってドミノゲームに興じている場所がある。昼食はリトルハバナ地区のレストランでキューバ料理を食べた。食後にバスで市内を巡る。フロリダ州はリタイヤした裕福な階層の人たちに人気のある州だ。そんな人たちが住む閑静な街並みにバスは進む。コーラルゲーブルズ市だ。市税を高くしているのが貧しい階層の人たちは市民にはなれないという。マイアミ市はクルーズ船の基地としても有名である。年間500万人の乗船客があるという。クルーズ船基地の見学については割愛する。

翌20日は、マイアミからフロリダ半島を南下して国道1号線の最先端キーウエストまで160マイルの道のりを片道4時間掛けて往復した。キーウエストからキューバまで90マイルであるが、直接渡る手立てはない。

21日早朝にホテルを発って、マイアミ国際空港からバハマのナッソーに向かう。そこからトランジットでキューバのハバナへの便に乗り換えるのだ。ナッソー・ハバナ便は1日1便しか運行されていない。実はマイアミからハバナ行きの直行便が1日に数便運行されている。しかしこれは亡命キューバ人が年に1度だけキューバに帰ることが許されていて、彼らしか使うことが出来ないのだ。我々旅行者は、3角形の2辺を使ってハバナに行くしかないのである。キューバには年間300万人の観光客が訪れるという。その内100万人がカナダ人だそうだ。従って、トロントからハバナへの直行便がある。

ナッソーからの便はハバナ空港第2ターミナルに着いた。このターミナルにはマイアミからの直行便も着く。従って、他のターミナルに比べてチェックが厳しいのだという。入国審査では特に海外旅行保険に加入していることを示さねばならない。保険会社は米国以外の会社でなければならない。保険加入を調べる理由については後述する。

ハバナ(写真3, 4)では現地ガイドのノエルさん(男性)が出迎えてくれた。彼は、筑波大学人文社

会系に留学し2年間で修士号を取得したそうである。予備教育の1年を含め3年間日本に留学した。分かりやすい日本語でガイドしてくれる。我々一行は翌22日(日)の夕食を佐藤キューバ大使とともにすることが出来た。従って、以下の話はノエルさんと佐藤大使から伺った話が下敷きになっている。

社会主義国キューバでは教育と医療が無償である。その結果として、国民の識字率は98%を超える。医師の養成に力を注ぎ1,000人当たり約7人の医師がいる。ちなみに日本は2.3人、米国2.6人(OECD Health Data2015による。キューバはOECD諸国には含まれていない)。海外にも緊急の際に医療チームを派遣する。エボラ出血熱の際には2,000人の医療チームを準備した。キューバの医療制度は3階層からなる。第1階層はファミリードクター制度で数10世帯に一人の医師と看護師が担当する。そこでの診療行為はいわゆる相談に乗るという程度で簡単な治療しかしないらしい。本格的治療が必要な場合は町の総合診療所に紹介される。さらに高度医療は総合診療所からの紹介により中核病院が担当する。この医療システムはデンマークのシステムに似ていると思った。デンマークは高福祉高負担の国だ。国の基盤は異なるにも拘わらず同じようなシステムを採っていることに興味を持った。このような医療制度の下で乳児死亡率はアメリカやカナダよりも小さい。キューバの一番の問題は少子高齢化であり、平均寿命は79歳である。入国の際に海外保険加入をチェックするようになったのは数年前からだそうだ。それまでは旅行者が医者に掛かっても無償だったのだろう。

キューバが稼いでいる外貨は第1に医療、第2に観光、第3がバイオテクノロジー、第4が砂糖、葉巻、ラム酒、ニッケルなどの産品だという。政府統計には表れないが、国外にいるキューバ人からの仕送りが実は3番目に入るのではないかということであった。

ハバナではホテルハバナリビエラに宿泊した。1950年代に建てられた古いホテルだ。建て付けがあまりよくない。2兌換ペソ(注1)を払うとWi-Fiが使用出来る。ところが宿泊室で電波を検索してみると隣にある最新のホテルの電波は届いているのに当のリビエラホテルの電波は微弱でキャッチ出来ない。やむなくフロント前の空間で利用した。使用時間は累積的になっている。ホテルにいる時間を小分けにして使用したので2ペソで十分であった。

(注1: 兌換ペソは外国観光客などが使う通貨で、田嶋がホテルで両替したときは1兌換ペソ=1USドル)
次頁の写真1~4は田嶋が撮影



【写真1】マイアミ港の客船ターミナル。一度に大型客船4隻の乗客が上下船できる。右上の島には映画スターなどの別荘がある。(マイアミからナッソーへの機内から撮影)



【写真2】マイアミからキーウエストまで260kmをサンゴ礁の島伝いに42の橋を渡る。右側が初期の鉄道橋で現在は遊歩道、左側が新たに建設された現在の車道橋。(往復8時間の日帰りバスツアーはかなりハード)



【写真3】ハバナ市内の1950年代のアメリカ車。主に外国観光客用のタクシーとして使用されている。画面上は1959年のキューバ革命まで使われた国会議事堂で、アメリカ合衆国の連邦議会議事堂を模して作られた。



【写真4】ハバナ市内の路上のお菓子売り。(11月下旬の雨上がり直後のハバナ市内を歩くと、じっとり汗が滲み出た)

—— NPO法人ACNの本年度事業ご案内 ——

第11回 ACN懇話会開催予定

- 開催日時：2016年10月5日(水)
- 開催場所：ホテルリソル佐世保
(長崎県佐世保市)

※詳細等については9月頃案内状発送予定。

◆ACNレポートのバックナンバーは右記URLにてご覧になれます。 <http://www.acn-npo.org/>